

シオン通信

大宮シオン・ルーテル教会

2013 年 4 月 第 37 号

日本ルーテル教団

大宮シオン・ルーテル教会

〒331-0814

さいたま市北区東大成町 1-229

phone/fax : 048-663-0215

URL <http://omiya.church.jp>

Email : heeme6343@gmail.com

梁 熙 梅(やん・ひめ)

イースターおめでとうございます

イエス・キリストが死者の中から甦られた大いなる出来事を私たちが祝うようにされていることに驚きと感謝を申し上げます。この驚きと感謝を主の恵みとして受け止め、出会う人びとと分かち合うようにしたいと思います。

みなさま、ご無沙汰しておりますが、いかがお過ごしでしょうか。寒かった冬を追い出しながら、強風に押し出されて来ているような感じはありますが、待っていた春が訪れました。大地は命に溢れています。大地の命あるものは生きていることを証しするために必死です。私たちも、自然界の働きに負けないように、主が甦り私の中で生きておられることを生き活きと伝えていきたいです。

この時を迎えるまでの四旬節の間、大宮教会は黙想の祈りをして過ごしました。長い沈黙の中で、心の深いところに語りかけてくる主の声を聞くための祈りです。み言葉を読み、その中でいくつかのことを祈りの中で聞き、それによって今まで理解していたこととは異なる答えが返ってくる。とても豊かなことを主は返してくださいます。これからも、黙想の中で祈ることの素晴らしさを忘れずに、日々の生活の中で生かしていくようにしたいです。これからも、第二・四水曜日午後 7 時より行なう予定です。

また、1 月よりテゼの歌による黙想と祈りの集いを始めました。毎月第 3 水曜日夜 7 時から 8 時半まで行なっています。そのために、毎月第 1 水曜日午後 7 時に集って歌の練習をします。練習したものが本番ではハモ二をなし、その美しさにうっとりされて祈りもスイスイ進みます。静かな中に流れる短い歌と沈黙のバランスは、主の恵み豊さにたっぷりと触れられるとても素敵なものです。どうぞ、近くまでこられたときには立ち寄ってくださり、ともに主の恵みにあずかりましょう。

会員の動きとしては、布川智康さんと麻里子さんが札幌中央教会へ戻りました。仕事の関係で長い間千葉に居住しながら大宮教会で信仰の交わりをさせていただきました。とても寂しいですが、同じ教団でいつでも会えると思うと変わったことは何もないような気がします。主の祝福のうちに新居地でも主に用いられておられることと信じます。

個人的なことですが、息子が念願の埼玉県立伊奈学園に入学しました。吹奏楽が強く、全国大会にまで進出するような高校を自ら選んで受験し念願を適えたのです。中学校でも県大会では三度も受賞するという喜びを味わっています。その味を生かして、是非、楽しく喜び溢れる高校生活を送ってほしいと願うところです。

聖書 ルカによる福音書24章1節～12節

婦人たちは、安息日には掟に従って休んだ。1 そして、週の初めの日の明け方早く、準備しておいた香料を持って墓に行った。2 見ると、石が墓のわきに転がしてあり、3 中に入っても、主イエスの遺体が見当たらなかった。4 そのため途方に暮れていると、輝く衣を着た二人の人がそばに現れた。5 婦人たちが恐れて地に顔を伏せると、二人は言った。「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。6 あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ。まだガリラヤにおられたころ、お話しになったことを思い出しなさい。7 人の子は必ず、罪人の手に渡され、十字架につけられ、三日目に復活することになっている、と言われたではないか。」8 そこで、婦人たちはイエスの言葉を思い出した。9 そして、墓から帰って、十一人とほかの人皆に一部始終を知らせた。10 それは、マグダラのマリア、ヨハナ、ヤコブの母マリア、そして一緒にいた他の婦人たちであった。婦人たちはこれらのことを使徒たちに話したが、11 使徒たちは、この話がたわ言のように思われたので、婦人たちを信じなかった。12 しかし、ペトロは立ち上がって墓へ走り、身をかがめて中をのぞくと、亜麻布しかなかったので、この出来事に驚きながら家に帰った。

腹六分の信仰者

腹八分という言葉が外国でもそのまま使われているようです。それくらい、腹八分の食事をするのが体にはいいということでしょう。

ある日、友人と食事をしながらこの話のついでに「人の欲望も腹八分で止められたらいいね」と言ったら、「否、腹六分くらいがもっと体にはいいらしいよ」とずばりと言われました。厳しい返事でした。

皆さん、イースターおめでとうございます

ます。復活の主の祝福が皆さまの上に豊かにありますようにお祈りいたします。

四〇日間の四旬節を経て今日主の復活を祝うときを迎えたわけですが、四旬節の間教会では、この日のための祈りをしてきました。その祈りの中で皆さんは神さまにどういう交わりをしていただきましたでしょうか。また、四旬節の間どんなことを節制しながら過ごされましたか。私は「時」、つまり「時間」の使い方にけじめをつけて、ほんの少しの時間でも大切に使おうと頑張りました。

「時」というのは、「時間」＝「お金」とい
いながらも、何気なく無駄に過ごしてし
まいがちですね。だらだらと一日とい
う時を使ってしまったり、いろいろのこ
とを一日に詰め込みすぎてあっという
間に過ごしてしまったりするので、ちゃ
んと自分のものとして使おうと努力を
しました。すると、不思議にもいろいろ
のことが具体的に見えてきて必要なこ
ととそうではないことが整理されてい
くのですね。祈りの時間が決まってきた
り、人と交わる時間が作られたりして、
とても豊かな時の使い方ができるよう
になりました。

ところが、その中で自分との闘いが始
まりました。整理されてきたのは、時間
の使い方だけではなく、自分の中にある
必要ではないものにまで気づかされた
のです。そこから自然に、自我との闘い
が始まり、そこで、今年の四旬節のテー
マを「死」と決めて過ごしたのでありま
す。その中で、どんなに闘っても死ねな
い自分がいる。しかし主は死なれた。死
んだ人だけが復活する。死ななければ復
活はない。このことは真理で、頭の中
では分かっていますが、実際行動に移すこ
とはなかなかできませんでした。

さて、キリスト教の教理の中で最も重
んじられているこの一つ、イエス・キリ
ストが死者の中から復活したという出
来事です。科学的に証明することのでき

ないこの教理の前で、多くの人が躓きま
すし、信じることをやめていきます。こ
の世の知識を通して理解しようとする
からです。事実、主イエス・キリストの
死と復活は、知識で受け止めることはで
きない出来事なのですね。

十字架の上で死なれた主はお墓の中
に運ばれて葬られました。

皆さんはイスラエルのお墓を見たこ
とがありますでしょうか。洞窟です。昔、
先祖のアブラハムの時代からお墓の習
慣は始まりますが、アブラハムの時代、
イスラエル民は遊牧民族でしたから土
地を持っていませんでした。妻サラに先
立たれたアブラハムは、サラを葬るた
めにヘト人から洞窟のある畑を買取り
ます。その洞窟の中にサラを葬り、後
にアブラハム自身も息子のイシュマ
エルとイサクによってそこへ葬られる
ようになります。

十字架から降ろされたイエスさまも
洞窟の中に葬られました。洞窟の穴は大
きな石でふさいであります。

主の復活を理解するためには、死んで
葬られたお墓がどういうところを指す
のかをまず理解する方が大事ですね。

お墓は死者を葬る場所です。死者が葬
られたお墓は死臭が漂っていることで
しょう。蛆虫もわいているのかもしれま
せん。決して生きている人が入りたく
ない陰惨としている闇の場所です。生
きている生命体のない、混沌としていて暗闇

に包まれているところであります。

主はそういうところに葬られていました。私たちはその中に入ってみるということを通してお墓がどんなところで、何を指しているのか分かることと思います。直接お墓の中に入ってみる。そうしない限り主の死と復活は他人事に過ぎないことになります。主の復活をみんなでお祝いしていても、それは形だけのことになりかねないのです。

しかし、よく考えて見ると、主の弟子たちも主が甦られるお墓がどこなのか分かりませんでした。それは、彼らが家に戸を閉めて閉じこもっている状態からも良く分かります。一步も外へ出ることを恐れている彼らに、主がどこへ葬られたのか分かるはずがありません。もちろん、頭の中ではあっち方面のあそこら辺くらいはわかることでしょう。

ところが、そんな彼らと対照的に女性たちは、安息日が明けるや否や主が葬られているお墓へ赴きます。主のご遺体に香料を塗る間もなく主は葬られてしまったからです。復活の朝は、この女性たちの動きの中でもたらされました。はやり、早起は得するものですね。

女性たちは、安息日があけるや否や、主のご遺体が納めているお墓にたどり着きます。しかし、お墓へ着いてみると主のご遺体はなく、お墓は空っぽです。

そのとき、途方に暮れる彼女たちに声が聞こえました。「なぜ生きておられる方を死者の中に捜すのか。ガリラヤにおられたころ、お話になったことを思い出しなさい。」

(5～6 節)。怖くて地面に顔を伏せている女性たちに聞こえて天使の声でした。「そこで、婦人たちはイエスの言葉を思い出した。」(8節)と書いてあります。み言葉の想起ですね。これはとても大事なことです。聞いたことのない言葉が思い出されることはない。聞いたことのある言葉だけが人の記憶力を促すとき思い出されて外に出てくるのです。折が良くても悪くてもみ言葉を述べ伝えなさいというのはそのためですね。

彼女女たちは直ちに男たちのところに走ります。隠れている男らに早くこの知らせを知らせたいというこの走り方は、彼女たちはもはや主の死者の中からの復活を信じた、ということですね。まだ疑っていたらこのような走り方はできないからです。

ところが、生き活きと主の復活を伝える女性たちの言葉を男性の弟子たちは、「この話がたわ言のように思われたので、婦人たちを信じなかった。」(11 節)。と書いています。ペトロもお墓へ走って行って確認はしますが、信じる様子はありません。

女性たちが言うことがたわ言のように思われたので、彼らは信じなかった…とても残念なことです。

信じるということはとても大切なことです。以前もお話したことがあります。赤ちゃんがいたずらをしなくなったときに、一度いっしょにいる大人の方を振り向くのだそうです。それは、自分が悪いことをしたときに、その自分をちゃんと受け止めてくれる人がいることを確認するためだそうです。その確認ができると子どもは安心していたずらができるそうです。

このことは、もっと大きくなった思春期にも現れます。心がぶれてどうしようもないときに、信頼できる大人がいれば子どもは自由に心の揺れを現します。しかし、信頼できる大人がいなくて、心の揺れを隠すか、または逆に現したまま非行の道へ入ってしまうかになる。

今、私は親としてまさにその最中にありますが、親としては一日何度ハラハラとイライラを繰り返していることでしょう。けれど、いつまでも続くのではないと思うと何とか受け止められます。このようなことを通して子どもと親、子どもと大人との信頼関係は築かれていくのですし、親との信頼関係が築かれた子は、社会に出ても信頼をもとに人間関係を築いていくようになります。

このように、受け止められている、信じられるということは素晴らしいことです。委ねられるということです、自分を人に。ありのままの自分を現しても恥ずかしくない相手がいる。自分がどん

なに破れた格好をして帰ってきても受け止めてくれる人がいる、そういう関係、それが確認できたときに人は安心して丸きりの自分を委ねられるのでしょうか。男女の関係では、もはやその人の中で死んでもいいという信頼関係です。あの人の中で死ぬことがむしろ幸せなのだと思いますほどの信頼の中で愛し合うことは、死をも恐れないものだと思うのです。

イエスさまの死はまさにそれでした。私たちを愛してやまない神さまの愛に促されて主は、私たちの中で死んでもいい、お墓のように闇に包まれて欲望の固まりであるこの私のようなものの中で死ぬことが幸せだと、この私を選び取り、私の中の闇のすべてを背負って死んでくださったのです。主が死なれた私の中、実は、それが主のお墓だったのです。欲望に満ちていて、ほんの僅かな時も人のために祈ることを惜しむこの私、自我実現のために主をも利用していたその私の中で主は死んでくださり、そして、復活してくださいました。神さまは、主イエス・キリストを、私の中で復活させてくださったのです。人の力ではどうしようもない大いなる出来事が私の中で起きたのであります。この朝、何気なく訪れた、いつもと変わらない朝が、私に永遠の命をもたらす永遠の朝になりました。

主は、以前、「友のために自分の命を

捨てること、これ以上に大きな愛はない」(ヨハネ 15:13)とおっしゃっておられました。それを、私の中で実現してくださったのです。

誰も私のために死ぬようなことはしませんし、できません。私自身も誰かのために死ぬようなことはできません。お金のために死ぬ人はいるかもしれませんが。財産のために、仕事のために、名誉のためにも死ねると思います。恥じることを嫌う人は、家紋のためにも死ねるでしょう。戦争の時には、多くの若者たちがいのちを落とし、敗戦が告げられると天皇のために命を捨てました。これらすべては虚しい死に方です。

だけど、人は、自分のために死ななければならない。というのは、実は、自分自身が土で作られた器であって、ちょっとした傷でもすぐ壊れていく弱い者なのだということを知らされなければならないのです。その土の器の中で、主が死に、復活して生きておられる。それを知られるとき、人は、自分に死ななければ、私の中で死んで復活した主がその中で生きていることを外へ証するようにならないからです。自分が死に復活の主が生きていく行き方、復活した主に出会った新しい生き方ですね。

しかし、この場に座っている今も、私たちの中は闇で包まれているのかもしれ

れません。必要のないこの世の知識でいっぱいになり過ぎていて、主の復活に関しては混沌とした状態なのかもしれません。神さまのものが入る隙がどこにもなく、欲望でいっぱいになり過ぎているのかもしれません。ならば、それでいいのです。そのまま静かに目をつぶってみてください。その自分の中の奥に、小さく、しかし確かに光るものが見えてくるはずです。復活の主の光が私の闇の中で輝いているはずです。

私の中の必要ではないものを取り除きながら光り輝いている主の光、それは、私たちが生きるべき命であります。本当に大切なことは何なのかを照らしてくれるこの光のもとで、身軽い歩み方をしたいです、腹六分まで減らして。減らしたところは必ず主によって満たされるということを信じて委ねたいのです。

主は、土の器である私の中で死に、よみがえりました。このことは、決して、たわ言ではありません。このことを信じる人は幸いです。

祈ります。

主よ、あなたは欲望の固まりであるこの私の中で死に復活してくださったのです。そのあなたを恐れることなく証しする者として、この弱い私が用いられますように。主の名によって祈ります。アーメン。

巡礼とテゼの旅 その2

肥後美子



9月20日 巡礼路 5日目 オーモン オーブラックからナズビナイルまで28km。この日は朝の気温が3度。草原には霜が降りていて、登ったばかりの朝日にキラキラと輝いていた。昨日は一日一人で歩いたが、この日は、27・5kmの道のりをフランス人のマルキョーと話しながら歩いた。何と彼の5回目のカミーノ（この巡礼のことをみなCaminoと呼ぶ）。10年前にル・ピュイからサンチエゴまで2カ月の巡礼を果たしている。もうじき父親になるという

彼は、巡礼を父親になる心の準備と考えているようだった。教育のこと、映画のこと、本のこと、子どもの時の思い出など不思議なように話題は尽きず、長いはずの道もそれほど長さを感じなかった。わたしはフランス語は話せない。お互いフランスなまり、日本語なまりの英語で。

途中のカフェで看護婦をしているナタリーともいっしょになり、途中の巡礼宿の庭でいっしょにピクニックをする。私のiPhoneに入れていたバルバラの「黒い鷲」をいっしょに口づさんだり、マルキョーがコッフェルでパスタを茹で、暖かい紅茶を入れてくれたりと、豊かで楽しいピクニックだった。ナタリーの巡礼は今日が最後。明日バスでパリに戻るといふ。こうして親しくなった人達と別れ、もう二度と会うことはないだろうという寂しさ。これもまたカミーノ。

わたしはなぜこの巡礼路を歩くのかと聞かれた時にはこう答えた。昨年の夏に母を、この冬に父を亡くし、その間に乳がんの手術をし、死を身近に感じ、自分の魂と向かいあう時間が必要だと感じたからと。様々に疲弊した心を、冒険に出かけることで癒したいと思った。たまたま本屋で目にした雑誌でサンチエゴ・デ・コンポステーラのフランス側の巡礼路を知り、テゼへ行く前にここを歩くことにしたのだが、しかしそれ以上に、以前読んだ高橋たか子氏の著書「巡礼地に立つ」（女子パウロ会出版・2004年）の文章が心に深く沈んでいたのかもしれない。旅から戻ってきて、この本をもう一度読み返し、あの時わたしの心に灯った巡



礼への想いが蘇ってきた。その本の中の文章をここに紹介しておこう。これは作家の依拠している資料にあった「なぜ巡礼するのか」という項目についてフランス語で書かれていたものを作家が翻訳した文章ということだ。

＜ 巡礼は「教会」の伝統の中で、象徴主義的な高い価値をもつもの。悔悛と愛との行為であり、イエス・キリストの福音に従う、一つの新しい生についての考えを誘引する。人生は一つの旅であることを暗示し、わたしたちすべてが向っている終末的な最後の目標を思い出させる。離脱を教え、さまざまな犠牲を課し、愛と連帯とを容易にし、躍動と願望と熱意を引き起こす。巡礼を企てて良い終着点に導くのは、ただただ祈りの中である。その道に身をおくことは、謙虚に貧しく前進することを受け入れること。また他の人々に出会って、その人たちと路上の僥倖、喜び、苦難、体験を分かち合うことを、引きうけることでもある。それは特に、わたしたちすべてに対して、あとに従うように、と招いておられる御方の、足跡の上を歩いていく、特別に恵まれた手段なのである＞

～ 4月教会行事予定 ～

テーマ：愛（ヨハネ 10：28）

- 7日(日) 礼拝後シオンの会/愛餐会/聖書の分かち合い
 - 14日(日) 礼拝後 13 時より墓前での祈り
 - 17日(水) テゼの歌による黙想と祈り
 - 20日(日) 信徒塾スタート(大塚さん、禹さん受講)
 - 28日(日) 韓国から来客 4 名(伝道フォーラム参加のため)。
- 礼拝説教 柴田千頭男先生
- 29日(月、祝日)～30日(火) 伝道フォーラム全国大会

～ 5月教会行事予定 ～

テーマ：一致(ヨハネ 17：23)

- 5日(日) シオンの会/み言葉の分かち合い
- 11日(土) 関東婦人の集い（飯能教会）
- 12日(日) 笠原光見神学生礼拝説教奉仕
- 15日(水) テゼの歌による黙想と祈りの集い
- 18日(土) 信徒塾(東京ルーテルセンター)
- 19日(日) 埼玉分区交換説教



大宮シオン・ルーテル教会

〒 331-0814 さいたま市北区東大成町 1-229

Tel/Fax 048-663-0215

URL : <http://omiya.church.jp>

Email : himei-y@oregano.ocn.ne.jp